

三溪園の「名人石」について

発表者：廣島会員、小島会員、片山会員

2015年1月に紹介した古絵葉書のコレクションの中にこの『名人石』がありましたが、現在の三溪園に該当する石は見当たらず当初は全くの謎でした。16年1月の中間報告を経て今回『名人石』について経緯を明らかにしようと試みました。廣島会員からは園内にある石を捜し歩いた事や『名人石』の名が唯一出てくる文献『三溪園保勝会 30年の歩み』の紹介などを、名人石と一緒に写る小さい石が向きを変えて園内に現存するのを私が発見したことから、片山会員からは園内にある『三溪翁の碑』が向きを変えれば名人石ではないかと指摘がありました。他の古絵葉書に偶然写り込んでいた物や関係者の証言をもとに、この石は下村観山や初代宮川香山などから三溪に贈られて初音茶屋近くに置かれていたのではないかと、との見解に到りました。戦後園内を整備した際に碑を作る話が出ましたが、資金不足の為園内にあったこの『名人石』に白羽の矢が立ち現在の場所に移動され三溪翁の碑として名が刻まれた様です。今後さらに『名人石』が三溪に贈られた経緯や文献の発見など引き続き調査していきたいと思えます。(小島)



古絵葉書『名人石』

ちょっと長めの自己紹介

発表者：南屋会員

私の入会の動機とこの数年の研究テーマであった「近代日本の産業化と美術の発展—原三溪と日本美術院の場合」を取り上げ、日本美術院創設者岡倉天心と原三溪の関係についてお話しさせていただきました。二人の交友関係を示す直接的な資料がないため、それぞれに関する文献を頼りに二人の関係をたどっていくと、二人の資質と活動環境にいくつかの近いものを見出すことができます。天心にとって自分に近い非凡な資質をもった三溪その人と、日本一の東洋コレクションを所蔵する



南屋会員の発表

三溪園は、自分の理想を実現してくれる理想の環境であったに違いありません。そして三溪には天心の理念を実現する財力がありました。特筆すべきは、三溪は美術館をつくらなかったけれど、天心からの作家支援の依頼を承諾することによって、三溪園を美術館として機能させたということでしょう。今後も新たな発見を期待して会に参加していきます。どうぞよろしくお願ひ致します。(南屋)